館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第13集

館林市内遺跡発掘調査報告書
TATEBAYASHI－SHINAI

1 9 8 6

館 林 市 教 育 委 員 会

例　　言

1. 本書は、館林市内に所在する遺跡の発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 本発掘調査は、市内に所在する遺跡における個人開発の事前確認調査と個人住宅建設に伴う緊急発掘調査である。
3. 調査は、館林市教育委員会が主体となり行ったもので、担当主管は文化振興課である。
4. 調査の期間は、昭和60年4月～昭和61年3月までである。
5. 調査に伴う諸経費は、国庫・県費補助により館林市が負担した。
6. 調査から、報告書刊行にあたり、諸氏・諸機関に御指導・御教示、いただいた。感謝いたします。

本　文　目　次

例　　言 …… 1
本文目次 …… 1
図版目次 …… 2
写真目次 …… 2
第Ⅰ章　館林の環境 …… 4
第1節　地理的環境 …… 4
第2節　歴史的環境 …… 6
第Ⅱ章　各遺跡の内容 …… 7
八方遺跡 …… 7
第1節　周辺の遺跡 …… 7
第2節　調査に至る経過 …… 10
第3節　D地点の調査 …… 11
第4節　E地点の調査 …… 16
第5節　F地点の調査 …… 17

図　版　目　次

第1図　館林の地勢と遺跡分布 …… 5

第2図　周辺の遺跡 …… 8

第3図　八方遺跡現況図及び地点図 …… 9

第4図　第5号住居址 …… 13 ～ 14

第5図　第5号住居址出土遺物 …… 15

写　真　図　版

写真1　館林地方を代表する景観 …… 4

写真2　八方遺跡全景 …… 7

写真3　D地点調査風景 …… 11

写真4　第5号住居址 …… 12

写真5　出土遺物 …… 15

写真6　出土遺物 …… 15

写真7　出土遺物 …… 15

写真8　E地点調査風景 …… 16

写真9　F地点調査風景 …… 17

写真10　調査風景 …… 18

写真11　遺構調査風景 …… 18

第Ⅰ章　館　林　の　環　境

第1節　地理的環境

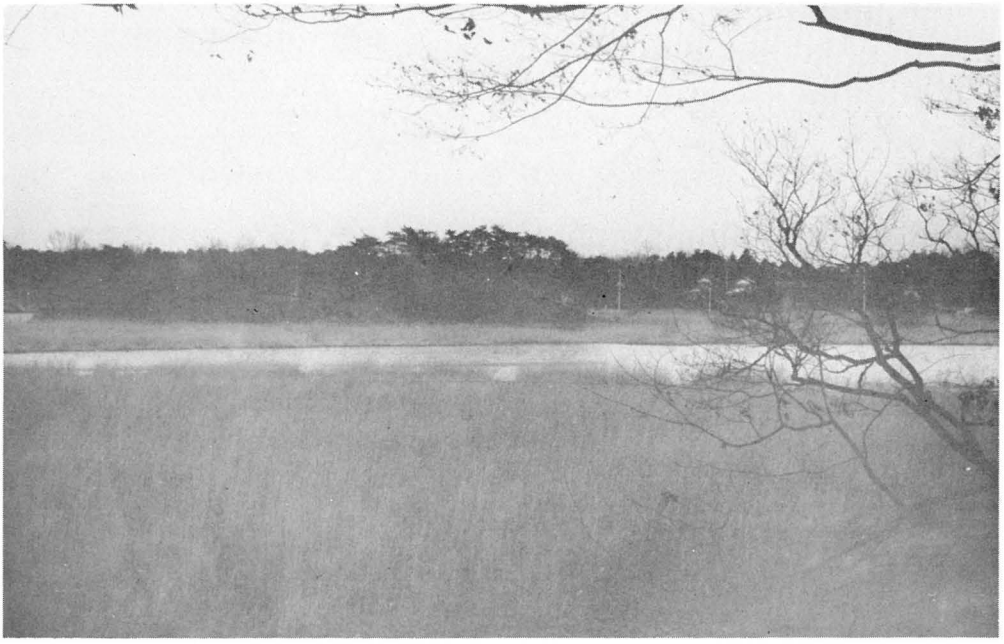


写真1　館林地方を代表する景観

館林市は、関東地方のほぼ中央部に位置する人口7万余の都市である。

館林市の載る館林台地は、関東地方のほぼ中央部、利根川・渡良瀬川にはさまれた地域に、浮島状に存在している。

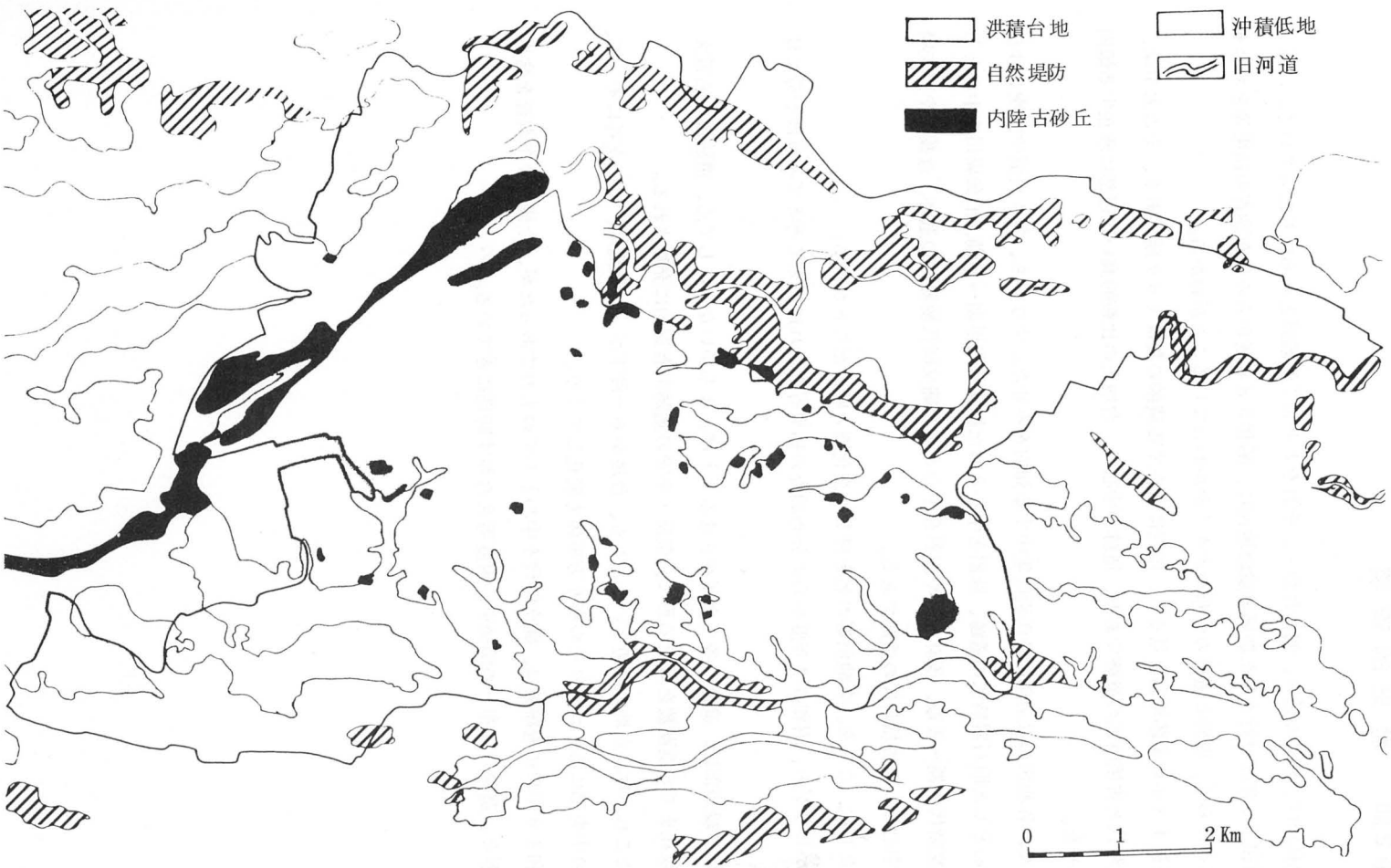
この台地は、下末吉期相応の洪積台地であり、河川堆積物の上に、風成ローム(関東ローム)の堆積したものである。

館林台地の南側は、構造盆地運動の北縁にあたると考えられ、加須低地をへて大宮台地に連らなっていると考えられている。

このため、台地の南側では、小支谷が複雑に入り込んでおり、その谷頭には、多くの池沼群や湿地の存在が確認される。

台地の周辺には、利根川・渡良瀬川の氾濫原が広がっており、氾濫原中には、中小河川の旧河道と、それに伴う自然堤防を確認することができる。

館林市の標高は、最高位の高根砂丘で、36 m、低地では、16 mと、比較的低くく、台地は、西から東へむけて緩傾斜している。



第1図　館林の地勢と遺跡分布

第2節　歴史的環境

館林市は、前述の通り、館林台地と、それをとりまく氾濫原とから成りたっている。

昭和４８年度刊行された群馬県遺跡地図に、昭和５８年度からの分布調査の結果等をあわせてみるならば、地形と遺跡の分布が大きくかかわっていることがわかる。

昭和４８年の遺跡地図を見ると、市内に所在する遺跡の数は４６ヶ所であり、その大半は、縄文時代と古墳時代の遺跡であり、遺跡の中心は、台地上の比較的高い縁辺部に所在する傾向をみせた。

また、各池沼の縁辺部に時代別に集中する傾向をみせた。すなわち、多々良沼や内陸古砂丘を中心とした旧石器時代の遺跡、城沼を中心とした縄文時代早期～前期、旧矢場川を中心とした縄文時代中期～後期、茂林寺沼や蛇沼を中心とした縄文時代後晩期の遺跡、近藤沼や旧矢場川を中心とした古墳時代の遺跡である。

私たちは、これを、各池沼群の名を付して文化圏と呼んだことがある。

しかしながら、昭和５８年度からの分布調査の結果等をこれに加えて考えてみれば十分ではない。

台地の縁辺部に、遺跡の多くを存在させることは、まちがいないにしても、遺跡数から言えば、現在までの遺跡数を超える形で、奈良・平安の遺跡が普遍的に発見される。

またこれらは、台地の縁辺というよりも、台地から一段下がった微高地、細い支谷にそって、台地の中央部にも、かなりその有り方事体も変化してくる。

昭和４８年時の遺跡数は、縄文時代を中心としてのものであったが、今後の分布調査を含めて地形と、遺跡の分布との関係を、再度考えなおす時期にきている。

第Ⅱ章　各遺跡の内容

八方遺跡

第1節　周辺の遺跡

八方遺跡は、東武鉄道伊勢崎線館林駅の北方約1.5Kmの所に所在する古墳時代～平安時代の遺跡である。

遺跡は、渡良瀬川の氾濫原に、突出する馬背状の舌状台地上に位置する。

第2図には、八方遺跡周辺の遺跡をあげた。

周辺には、旧石器～古墳時代にかけての長い期間にわたり人々の生活の痕跡がたどれる。

中でも、外和田遺跡と本遺跡では、古墳時代の住居址等が、調査されている。

山神脇遺跡（３）は旧石器、高根遺跡（４）は、旧石器・縄文～古墳時代、岡野遺跡（６）岡遺跡（８）、朝日町遺跡（１２）、大街道遺跡（９）では、縄文時代の遺物が採取できる。

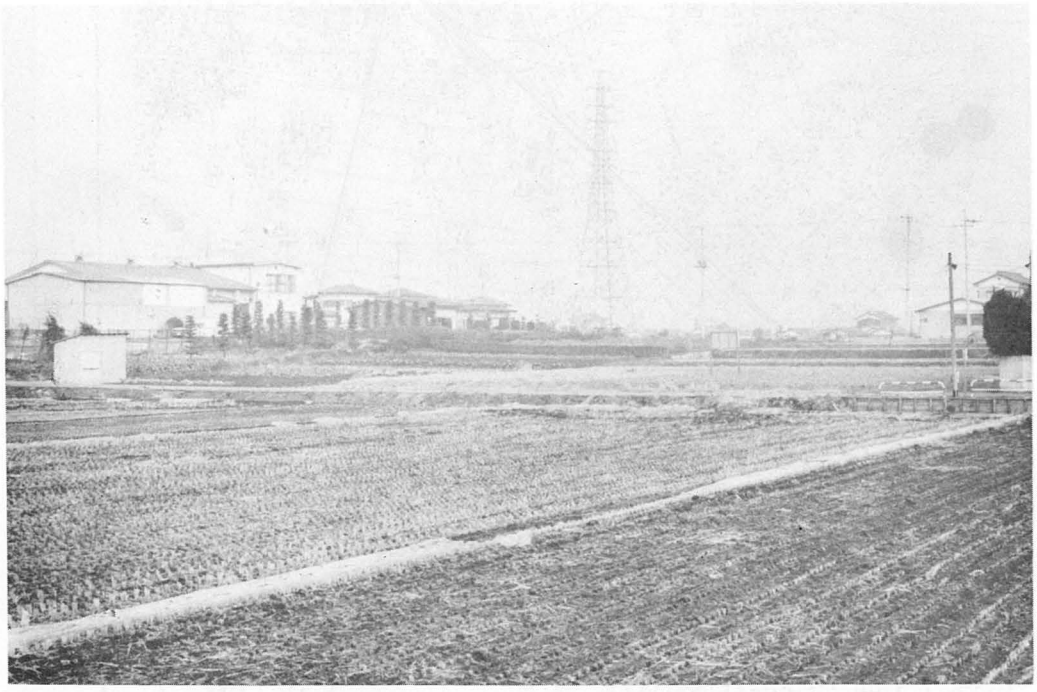
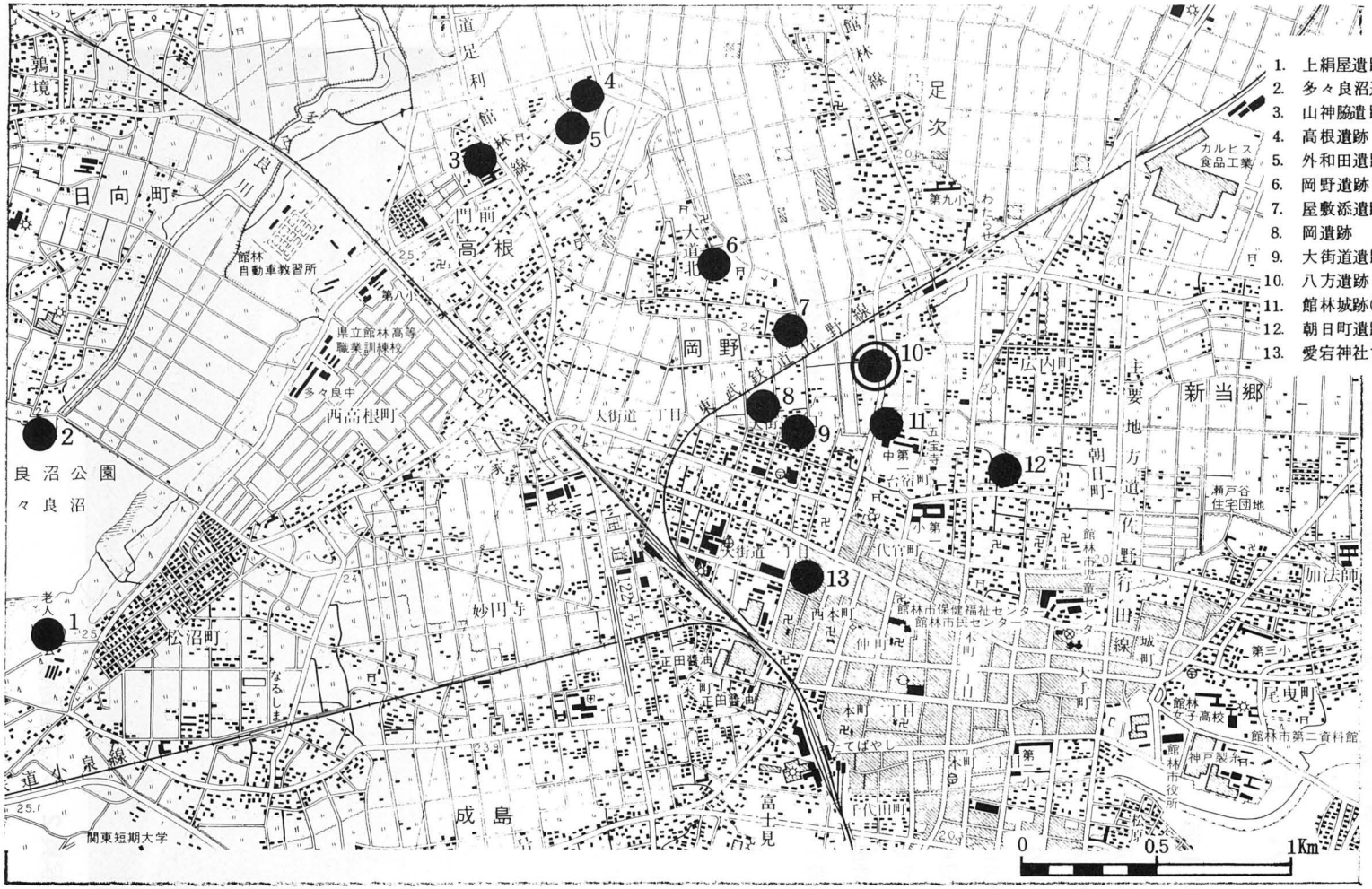
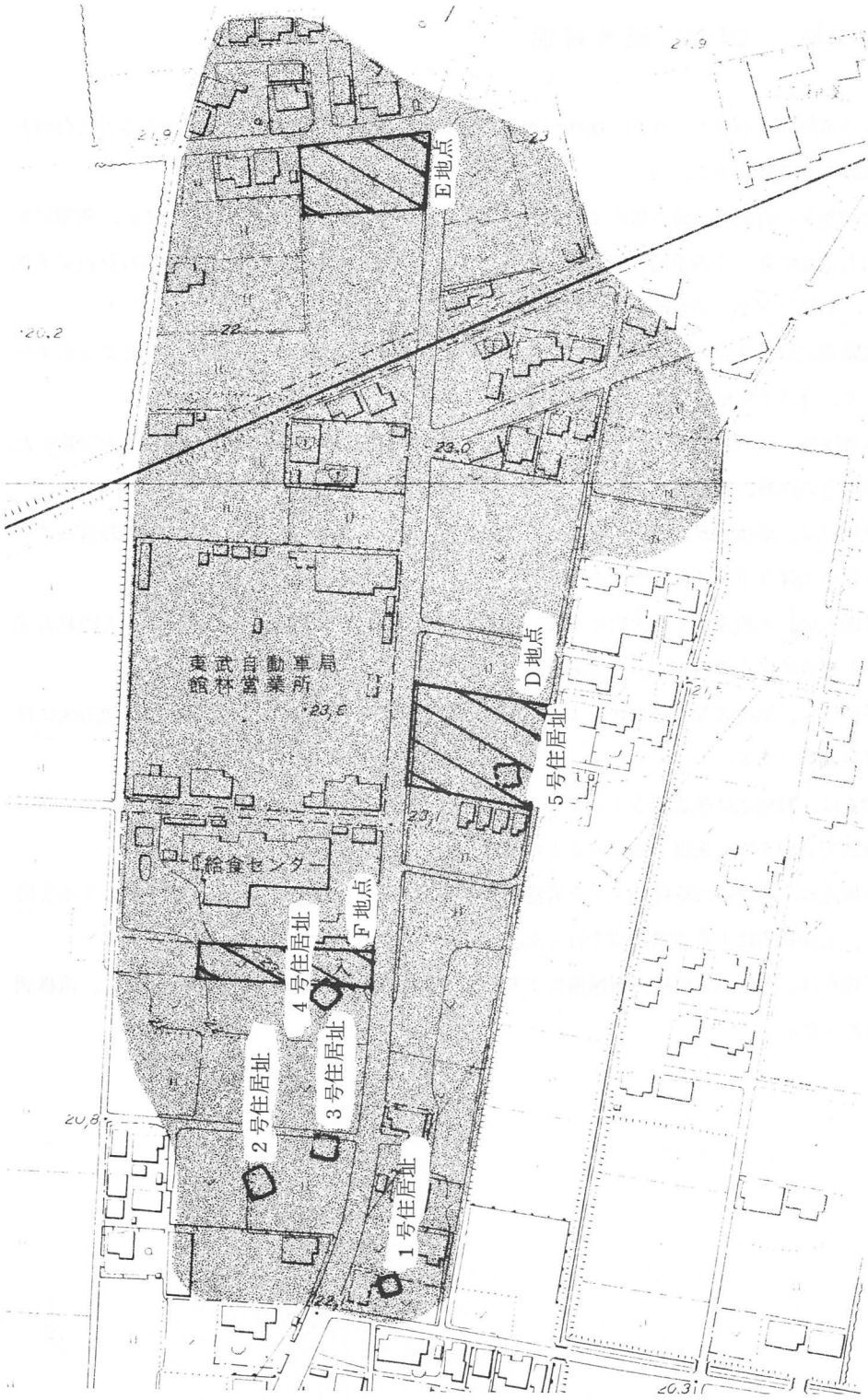


写真２　八方遺跡全景


1. 上絹屋遺跡
2. 多々良沼遺跡
3. 山神脇遺跡
4. 高根遺跡
5. 外和田遺跡
6. 岡野遺跡
7. 屋敷添遺跡
8. 岡遺跡
9. 大街道遺跡
10. 八方遺跡
11. 館林城跡(後期)総曲輪
12. 朝日町遺跡
13. 愛宕神社古墳
日向町
高根
岡野
新当郷
広内町
朝日町
松沼町
妙円寺
成島
富士見
加法師
尾曳町
良沼公園
々良沼
館林自動車教習所
県立館林高等職業訓練校
多々良中
西高根町
大街道
丁目
館林市保健福祉センター
館林市民センター
館林女子高校
館林市第二資料館
神戸製糸
館林市役所
関東短期大学
カルピス食品工業
0
0.5
1Km

第2図　周辺の遺跡



第3図　　八方遺跡現況図及び地点図

第2節　調査に至る経過

八方遺跡は、前述のとおり、館林台地の北側から、渡良瀬川の氾濫原に突出する舌状台地上に位置する遺跡である。

昭和46年の群馬県遺跡台帳によれば、本遺跡は、破壊されたと記載されているが、昭和57年度個人宅造に伴って古墳時代の住居址が発見されて以来、周辺地には、まだ遺構の存在が予想され、昭和58年度、昭和59年度と開発に伴って、遺構が確認されている。

遺跡周辺は、昨今の人口増加に伴って、宅地化がめだつ地域であり、高台であることも手つだって、今後も宅地として開発されるであろう地域でもある。

本年度は、個人の開発に伴って、D地点、E地点の確認調査とF地点の発掘調査を実施した。

各地点の位置、八方遺跡の現況については、第３図に示した。

D地点は、地権者日比野周作氏による、館林市大字当郷八形３２４１における個人経営のアパート建設に伴う事前確認調査である。

E地点は、地権者金子菊次氏による、館林市大字岡野字八方４２－１における個人経営のアパート建設に伴う事前確認調査である。

F地点は、地権者荒井慶助氏による、館林市大字岡野字八方２３－１における宅地造成に伴う緊急調査である。

調査は、D地点は確認調査であるため、開発予定区域に２m×２mのメッシュをかけ、ちどり方式で試掘をし、遺構を確認したものである。

E地点は、D地点の時間的ロスを考慮のもと開発区域を掘削機により全面表土剝きすると同時に、表面精査により遺構確認を行った。

F地点は、E地点と同様、掘削機により、表土剝ぎを行い、遺構確認を行った上で、遺構調査を行った。

第3節　D地点の調査

写真6　D地点発掘風景

D地点の調査は、前述の通り、地権者日比野周作氏の館林市大字当郷字八形3241における個人経営のアパート建設に伴う事前確認調査である。

調査は、開発予定地に、1辺2mのメッシュをかけ、ちどり方式で遺構確認を行ったが、ちどり方式では不明な点が多いことから、遺構と思われる地域は、拡張し遺構確認をした。

このようにして住居址、8軒を確認したが、今回地権者と協議し、住宅にかかる5号住居のみ試掘という形をとった。

5号住居址は、調査区の東南に位置する。

8.40m × 7.40mの長方形を呈する比較的大きな住居址である。

覆土は、その大半を、後世の耕作等により攪乱されている。特に東部は床まで耕作が達しており、わずかに床面の範囲のみを確認できるのみであった。

わずかに残る壁の現高は、約20cmでほぼ垂直に立ち上がり、床はほぼ平坦に踏み固められている。柱穴は4本、貯蔵穴は東の隅に深さ80cmで検出できた。

カマド、炉は確認できなかったが、北壁よりの床面に溝によって破壊されながらも、わずかに粘土と焼土が確認されている。

出土遺物は、1400片以上に及ぶが破片が多い。

〔1〕は、貯蔵穴内で倒れ込んだ形で検出された長胴の甕である。

口縁部は、孤状に外反し、ヨコナデにより調整されており、胴部は縦に長くヘラ削りで、底部近くでは、斜めにヘラ削り調整されている。

内面は口縁部はヨコナデ、胴部は幅広のヘラナデによる調整である。

〔2〕は、甕の底部で、外面は斜めのヘラ削り、内面はヘラナデにより調整されている。

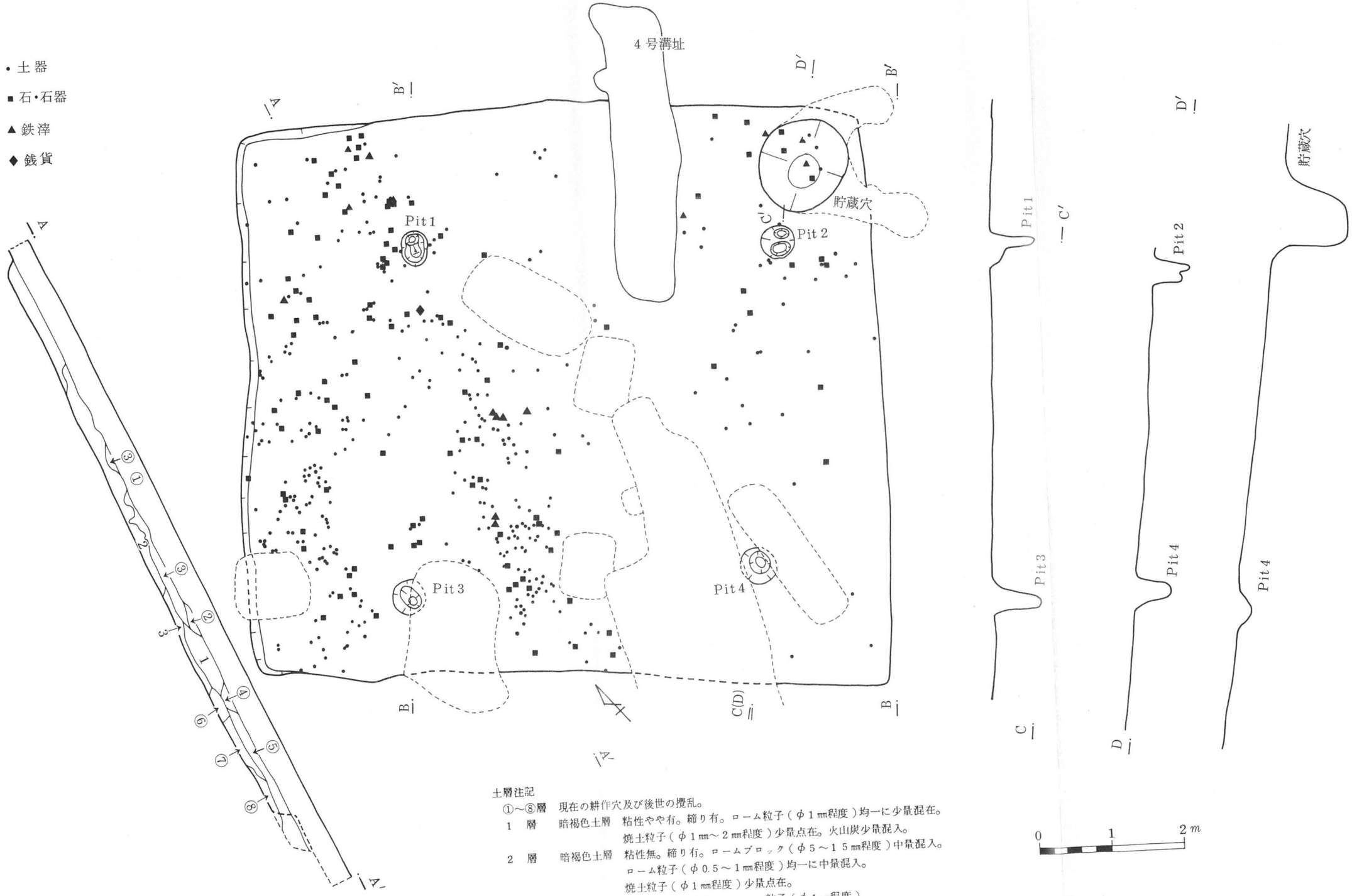
〔3〕は、土錘である。胎土は荒砂が多量に混入されている。

〔4〕は、羽口である。覆土中から鉱滓が多く出土しており、砂のついた鉄釜状のものが存在することから、本住居址は鍛冶遺構として考えられるかもしれない。

羽口は、暗灰白色を呈する須恵質の土製品である。

なお、その他の住居址等は、駐車場下に在る。

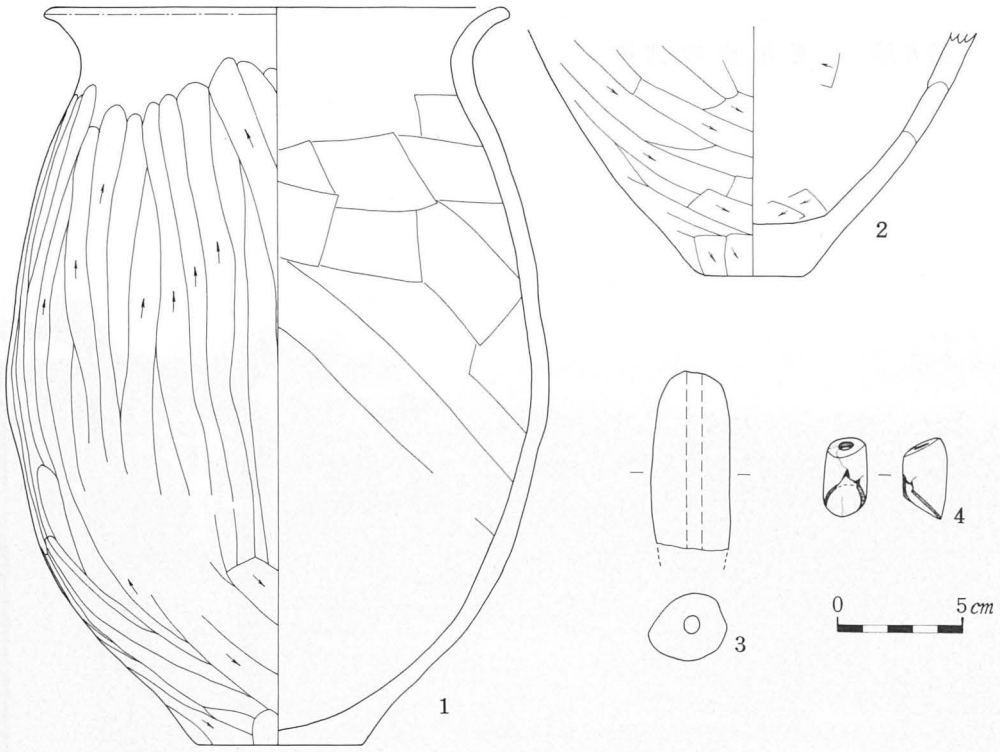
写真4　第5号住居址



土層注記

①～⑧層	現在の耕作穴及び後世の攪乱。	
1 層	暗褐色土層	粘性やや有。締り有。ローム粒子（φ1㎜程度）均一に少量混在。 焼土粒子（φ1㎜～2㎜程度）少量点在。火山炭少量混入。
2 層	暗褐色土層	粘性無。締り有。ロームブロック（φ5～15㎜程度）中量混入。 ローム粒子（φ0.5～1㎜程度）均一に中量混入。 焼土粒子（φ1㎜程度）少量点在。
3 層	暗褐色土層	粘性無。締りやや有。ローム粒子（φ1㎜程度） ロームブロック（φ3～5㎜程度）をマーブル状に混入。
4 層	褐色土層	粘性無。締り弱。ローム粒子（φ0.5～1.5㎜程度）多量均一混入。

第4図　第5号住居址



第5図　第5号住居址出土遺物

写真5　出土遺物

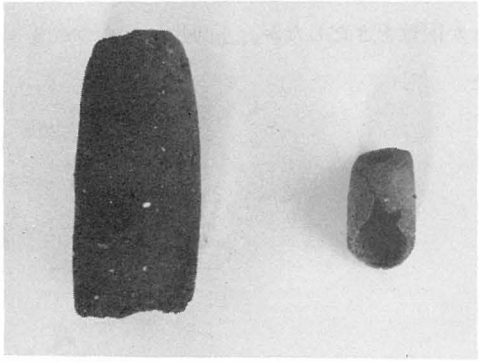


写真6　出土遺物

写真7　出土遺物

第4節　E地点の調査

写真8　E地点調査風景

E地点は、前述のとおり、地権者金子菊次氏による、個人経営のアパート建設に伴う事前確認調査である。

この地点は、八方遺跡では、北端にあたる地域でもあり、遺物の散布も少なかったが、土師片が表面でいくつか確認された。

確認調査は、時間的ロスも考慮し、表土を掘削機を用いて行った。

その上で、全面をジョレンガケを行い、遺構確認を行ったものである。

遺構確認は、耕作物として桑が入っておりなかなか困難をきたしたが、土師片がいくつか出土したものの、遺構としては、とらえられなかった。

第5節　F地点の調査

写真9　F地点調査風景

F地点の調査は、前述の通り、地権者荒井慶助氏による館林市大字岡野字八方23－1における宅地変更に伴う整地による事前発掘調査である。

調査は、整地予定地域全体を掘削機による表土剝ぎの後、精査、遺構確認の上、遺構調査を行った。

又、将来畑として利用される地点にあっては、上作の関係から、トレンチを入れ、遺構確認を行った。

調査区は、ちょうど、馬背状の頂部にあたっており、調査区東側、及び西側へゆるやかに、傾斜している。

最も高い部分は、耕作による攪乱がひどいが、円形の土坑を2基確認でき、東斜面では住居跡1軒が確認された。

畑部分となる地点には、遺構は確認できなかった。

写真 10　調査風景

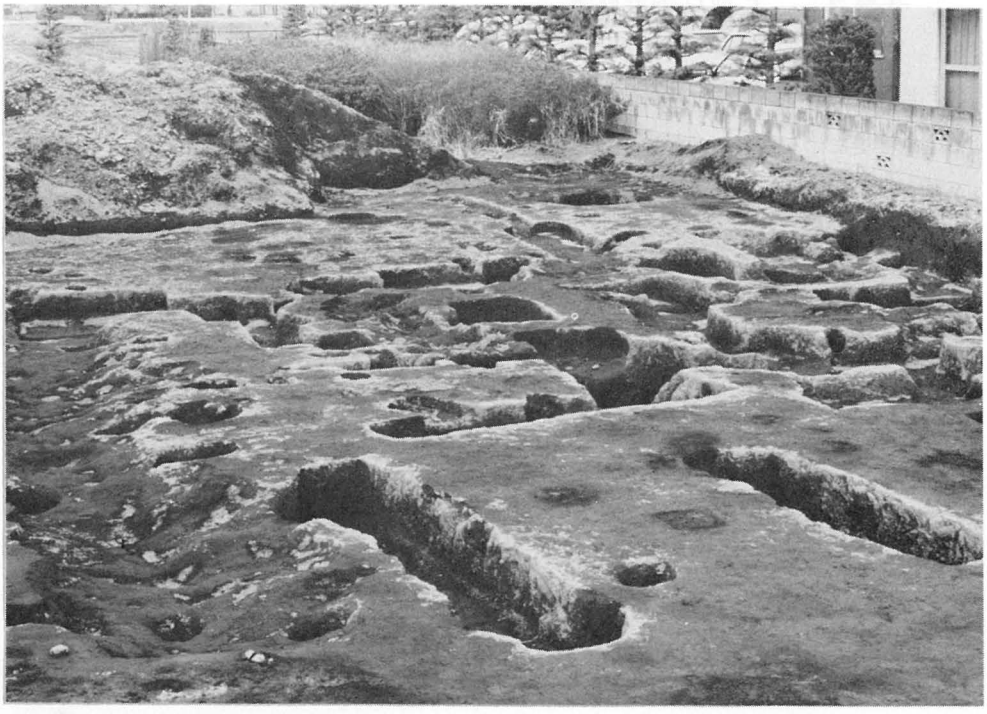


写真 11　遺構調査風景

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第13集

館林市内遺跡発掘調査報告書

発　　行　館林市教育委員会
印 刷 所　オーラ印刷有限会社
発行年月日　昭和61年3月31日

文化財愛護シンボルマーク
故郷の文化と歴史をみなおそう